

合評会 川又俊則・寺田喜朗・武井順介編著

『ライフヒストリーの宗教社会学』ハーベスト社、2006

川又俊則・寺田喜朗・武井順介「序章 ライフヒストリー・アプローチと宗教社会学」

井出 裕久

0. 感想

触れずにすまずこともできた、やっかいな方法問題に関する議論（序章）を掲載した志の高い著作

1. ライフヒストリー・アプローチへの誤解

質問：「宗教社会学は十分理解していても、ライフヒストリー・アプローチを誤解している人たち」[5]の誤解とは、どのような誤解？

2. オーバー・ラポールと共感的デタッチメント

「オーバー・ラポールの問題とは、[論理的に考えれば、調査者と被調査者との関係が友好的になり過ぎることによって生じる問題ではなく、]調査者がリアリティのせめぎ合いにおいてインフォーマントに敗れたことに過ぎないと、ラポールを重視すること自体へ疑義も投げかける議論もある [中根光敏]。ライフヒストリー・インタビューにおいて、このラポールに関わる問題はどのように考えたらいいのだろうか」[7-8]。

佐藤郁哉：「一步距離をおいた関与」「客観性を失わないラポール」[8]

B. ウィルソン：「共感的デタッチメント」[8]

||

「研究者の立場」[16]

「研究者の立場の至上性」[16]と「当事者に完全に同一化する立場」[17]という「相反する両義的な立場性」

|

「共感的デタッチメント」：「共感」と「デタッチメント」[17]

「内在的理解」[17]

疑問：「当事者に完全に同一化する」とは、中根のいうオーバー・ラポールの状態のことではないだろうか？

2. 「調査者の熟練」

ライフヒストリー・インタビューの「流動的な状況を乗り切るための技術と戦術」[8]

「方法論として客観化された手順に則って達成される」[青木秀男] べく、積極的に議論すべき問題」[8]

|

「執筆者たち自身……透明化もしくは明示化と換言できるような形での調査研究を試みて

いる」[8]

||

「データ収集プロセスの透明化」[12]

疑問：「客観化された手順に則って達成」することと、事後的に「データ収集プロセス」を「透明化」することはおなじことだろうか？

3. ライフヒストリー・インタビューの「話題特定性・課題遂行性・制度的非拘束性」

「調査者が質問しない限り……（話題特定性）」[9]。

「……（課題遂行性）……「語られないこと」が生じ……」[9]

質問：話題特定性・課題遂行性は、調査者が避けるべきこととして記述されている？

（「語り手と聞き手の存在被拘束性（関係性・権力性）に付随して、語りの主題は被規定性を帯びる）」[11]。

4. 「歴史的存在」としての調査対象と「信頼性」

「カークとミラーは、質的な調査研究の対象が、日々変化を遂げる歴史的存在であり、多様な解釈を導く存在であることに注意を促している」[12]

質問：「信頼性」を文字どおりに「共時的」に検証することができないとすれば、厳密な意味での「共時的信頼性」はそもそも望みえないことに、カークらは注意を促している？

5. 「分析上のカテゴリー」と「彼ら自身の術語」

質問：「分析上のカテゴリー」と「彼ら自身の術語」はおなじもの？

執筆者（编者）の担当章では、どの「カテゴリー」「術語」？

「行為者の語りから人々の主観的現実接近し、そこから分析上のカテゴリーを引き出すライフヒストリー・アプローチは……」[12]

「可能な限り、「彼らが理解していることがらを彼ら自身の術語で」理解すべきである」[17]